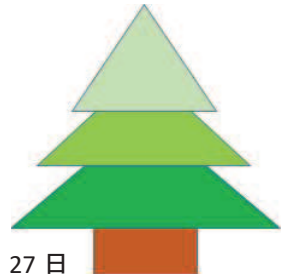




嵯峨宮頼り

第 8 号



嵯峨宮：群馬県みどり市大間々町小平 348 番地

発行日：2019 年 11 月 27 日

発行：嵯峨宮世話人会

令和元年度
秋季大祭
台風の影響なく無事終了

嵯峨宮令和元年度の秋季大祭は予定通り十月十四・十五日と無事楽しく行われました。残念ながら十三日早朝に予定していた旗立ては台風十九号の影響により中止となりました。中部・関東・東北と広範囲に甚大な被害をもたらした。西毛も栃木も大きく被災しましたが、それらの中間に位置するみどり市と桐生市は奇跡的に無事で、神風を守られた感があります。今年の祭の挨拶は「無事でよかったですね。」から始まりました。

例年旗立ては昭和会が中心となつて行つていましたが、今年は嵯峨宮から通知しました。果して人数が集まるか、高齢化で集まっても揚がらない時がある、旗を小さく作り直すか、

元消防小屋のホース掛けに下げるか等々、今の旗を断固建てるべき派から身の丈に合ったやり方に変えるべき派まで、将来への懸念は皆同じです。

今年の祭には新しいお客様がありました。一つは先月文化財調査に来た方々がさらに関係者を連れて再度見に来てくれたこと、二つ目は幼いひ孫を連れて高齢の女性がきつい階段を登つて来てくれたこと、三つ目は交番のお巡りさんが来てくれたことです。



修繕されたばかりの床

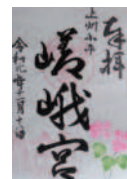
と、本殿の彫刻のすばらしさを堪能して頂きました。

感謝状の贈呈

是迄永きに亘(わたり)当社へ継続的に経済貢献されてきた次の方へ感謝状を贈らせて頂きました。副賞は小平の里「遊湯館」の入場券です。躰を癒して頂ければと思います。(贈呈者) 黒田友宏様

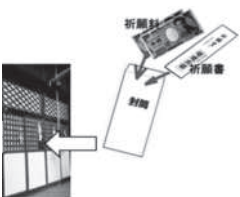
御朱印準備中。

嵯峨宮では御朱印の準備を進めております。十二月十五日の埋蔵祈願式の後、初披露させて頂きます。



埋蔵祈願式 十二月十五日(日)11時より

令和元年度の埋蔵祈願式は十二月十五日(日)に嵯峨宮境内にて行います。埋蔵祈願される方は記願書に祈願文を書き込み、祈願料千円と共に封筒に同封して、十一月十三日までに神社のお賽銭投入口へ投入して頂ければ埋蔵祈願させて頂きます。祈願書や封筒は神社に備え付けてありますのでご利用ください。小平にお住いの方には役員より伺わせて頂きます。尚、車でお越しの方は小平の里へ駐車して下さい。よろしくお願い致します。



キレイになったね。

日本語では部屋を片付ければキレイになるといい、女性が化粧してもキレイになるという。

最近「嵯峨宮はキレイになったね。」と言われた。世話人として大変うれしいお言葉だが、さてどつちのキレイか。以前は社殿内外に様々なモノが置かれていた。断捨離し、使われないモノは廃棄し、掃除用具は手造りキャビネットに収納してキレイにしたツモリだ。



キャビネット

一方、最近スマホで写真撮ってネットに投稿するインスタグラムなるものがやはり「インスタ映え」するものが求められる。そこで、嵯峨宮もペンキで

化粧しキレイにしたツモリだ。



辞書「大辞林」で「キレイ」を調べてみる。

きれいな【綺麗・奇麗】

- ①目に見て美しく心地よ
 - いさま。美麗。「いな景色」
 - ②耳に聞いて美しく心地よ
 - いさま。「いな声」
 - ③よこれがなくさっぱりしているさま。清潔。「ーに洗濯する」
 - ④やましい点のないさま。けがれのなきさま。潔白。「身边をーにする」
 - ⑤男女間の肉体的交渉がないさま。清純。純潔。「ーな体」
 - ⑥きちんと整っているさま。整然。「足並みがーにそろろう」
 - ⑦「きれいに」の形で残りなく事が行われるさま。すつかり。「借金をーに返す」
- ーこの場合①と③の意味に適合する。

ところでキレイに関する言葉で「きれいは汚い、汚いはきれい」という台詞がシェイクスピアのマクベスにある。共通する意味内容を表す言葉に、「ロバにはロバが美しく、ブタにはブタが美しい」といった格言が挙げられるという。トイレのテレビコマーションにある、人間にとってキレイに洗浄できる便器はばい菌にとっては忌み嫌うべきことであり、きれいと汚い、美と醜といった概念のあり方は価値の相対性を意味する。「蓼(たで)食う虫も好き好き」とは言え、「キレイになったね」の一言は、この上ない励ましのお言葉である。

鎌倉武士の服装

ひたたれ直垂

嵯峨宮創立の嘉暦元年(1326年)は鎌倉時代の末期にあたる。埋蔵祈願式では当時の衣装直垂(ひたた

れ)を模した衣装を着て行う。武士の装束も平安期から江戸期まで様々に変化している。平安期の武官束帯(そくたい)、平安末期から鎌倉初期の狩衣(かりぎぬ)、鎌倉後期の直垂、室町の大紋(だいもんじ)や素襖(すおう)直垂、戦国期の肩衣袴(かたぎぬばかま)、江戸期の長袴(ながかましも)である。



(平安後期・鎌倉初期・狩衣)



(鎌倉後期・室町・直垂)



(江戸期・長袴)

これらは礼服の類だが

庶民の直垂もある。

狩衣は平安時代の公家の衣装で、元は狩の時に着用しこの名前がついた。現在神職の服装として用いられている。直垂は相撲の行事に見ることが出来る。上半身用と下半身用の二部式構成、上半身の着衣を袴に着込めて着用する。前合わせは垂領(たりにくび)襟を肩から胸の左右に垂らし、引き合わせて着用)。社(おくみ)。着物の左右の前身頃に縫いつけた襟から裾までの細長い半幅の布)を作らず襟を付け、打ち合わせを紐で結ぶ。脇が縫われておらず、開いている。襟の左右に紐(胸紐)を付けてこれを結んで前を留める。袖と裾にも紐を通し、くくって止めることが出来る実用性を備えている。帽子は鎌倉初期は立烏帽子、後期は侍烏帽子で頂頭掛の懸緒をつけるが平常は小結(こゆい)でとめている。(阿直)